

抵抗はどこまで可能だったのか ——その現実と戦後の解釈——

学習院女子大学教授 武井彩佳

はじめに¹

歴史の研究で、「もし～だったら」という問いは一般に禁止されています。それでもあえて「もし～だったら」と問いかけ、世界はどう違っていただろうと想像してみるとするとどうでしょうか。

「もしヒトラーがいなかったら」という問いを立ててみましょう。ヒトラーが政権を取らなかったら、政権を取ったとしても早い段階でヒトラーが排除されていたら、世界はどうなっていたのでしょうか。まず、第二次世界大戦は始まらなかった可能性があります。そうすると、1941年の独ソ戦もなかったかもしれない。その場合、ホロコーストも起こらず、イスラエルというユダヤ人国家は建国されなかったかもしれません。パレスチナ問題も発生しなかった可能性があり、もしかすると現在まで続くイスラエルとアラブ諸国の対立もなかったのではないのでしょうか。

もちろんヒトラーがいなかったら、世界がより良いものになっていた保証などはどこにもありませんが、この人物がいなかったら世界は確実に違うものになっていました。そしてこの「もしヒトラーがいなかったら」という問いは、1945年に戦争が終わったとき、多くのドイツ人の脳裏をよぎった問いではなかったかと思います。ヒトラー政権が生まれなければ、ヒトラーが暗殺されていたら、ドイツにはもっと違った道があったはずだと。

しかし現実とは違いました。実際にはドイツの名の下に多くの人が殺され、ドイツは敗戦国となり、占領され、大きな罪を背負いました。その現実を前にした時、ドイツ人はなぜヒトラーに対する有効な抵抗運動が生まれなかったのか問わざるを得ませんでした。ドイツ人はナチズムに抵抗しようとしたのか。抵抗しようとしたけれど、できなかったのか。こうした問いは、戦後ドイツの出発点になります。自分たちはこれ

1 本稿は、南山大学ヨーロッパ研究センター・外国語学部ドイツ学科主催講演会（2021年1月8日「ナチスに抵抗した人々」シリーズ第2回講演会「抵抗はどこまで可能だったのか—その現実と戦後の解釈—」）の講演原稿に手を加えたものである。

からどのような社会を創っていきたいのか、どのように民主主義を再建していくのかを考えたとき、どうしても「抵抗」について考えざるを得なかったのです。

抵抗について問わざるを得なかったのは、実は犠牲者の側も同じでした。ホロコーストの犠牲者であるユダヤ人も、違った意味で同じ問いを立てざるを得ませんでした。なぜ、600万人も殺されたのか。よくユダヤ人は「屠畜場に引かれてゆく羊のように殺された」と言われてきました。なぜ抵抗しなかったのか。それともできなかったのか。抵抗への意思は死者の名誉を救い、残された者たちには生活再建の指標となります。このように抵抗の問題は、ドイツ人にも、ユダヤ人にも、戦後の出発点であったのです。

今日は、ナチ体制下における抵抗について、ホロコーストとの関連で見ていきましょう。

ナチ体制下で「抵抗」が意味したもの

ではまずナチ体制下で抵抗するということが何を意味したのでしょうか。当時「強制的同質化 (Gleichschaltung)」という言葉がありました。もともと「均質にする」という意味ですが、これは社会がナチ一色に染まり、画一化されてゆくことを指しています。例えば子供は学校でナチ的教育を受け、週末はナチの少年団で活動し、その延長線上で軍事訓練を受け、兵士となってゆきます。ナチ的な環境で社会化し、大人になり、結婚をしていきます。こうした生活が当然視されていますので、その流れに「乗らない」人は相当な精神力が必要です。逆に言うと、その流れに乗った人には、比較的「楽」であると言うことができます。国がいろいろと面倒を見てくれるからです。

ナチ体制は適度に利益誘導型の社会でしたので、ナチ政権はある意味では面倒見が良い政権であると言えます。子供の多い家庭には育児支援を出し、若いカップルには結婚資金を貸与し、貧困者に対しては冬になるとナチ福祉団体が衣類を送ります。こうした国民の福祉の原資は、実はユダヤ人や占領地経済からの収奪によることが多いのですが、この点は国民には伏せられています。

物や金の分配だけではありません。戦争で働き手の足りない農村には、ナチの労働団体がボランティアの青少年を送り込んでくれます。つまり国民にとってはいろいろな意味で「悪くない」体制なのです。したがって「強制的同質化」と言っても、人々が無理矢理ナチ化を強いられるというよりは、流れに乗った方が利益があるために参加すると言う方が正しいのです。

国民の側からすると、国の政策の恩恵を受ける以上、国民としての義務を果たすの

は当然です。それはナチ体制を支持し、いざという時に国のために命を投げ出すことなのですが、こうした中、社会全体が一種の疑似家族のような様相を呈するようになります。民族という血でつながり、社会、労働、教育、全てが一体化していく社会——こうした社会は「民族共同体（Volksgemeinschaft）」と呼ばれています。

民族共同体は、その内側にいる人には比較的居心地が良い場所ですが、成員資格がないとされた人々には、極めて過酷な場所になります。では、メンバーシップを否定された人々とは誰でしょうか。まずユダヤ人です。次に政治信条を異にする共産主義者や社会主義者。ロマ、同性愛者などです。

こうした人々を排除することに、国家は一定の利益を見いだしています。例えばユダヤ人を福祉から切り離せば、余分なところにお金を回さなくてもよくなるため、ドイツ市民の福祉は向上します。ユダヤ人に特別税をかければ政府の予算が増えます。実際に歴史家ゲッツ・アリーは、ドイツの戦争経費に転化されたユダヤ人財産の額を150～200億マルクと推定しています²。

特定集団の排除には、個人レベルでの利益もあります。例えばユダヤ人の上司が解雇されることによって職場ではポストが空き、彼らから没収された財産の配分を手にもすることもできます。私は以前、ユダヤ人の財産がナチ時代にどのようにドイツ社会に吸収されていったか調べたことがありますが、その実態はかなり衝撃的なものでした。

まず、ヒトラー政権成立以降、「アーリア化」と呼ばれた、ユダヤ人所有の財産を「アーリア人」であるドイツ人の所有に移行させる政策が取られます。この過程でユダヤ人の困窮化が進みます。そして1941年10月にユダヤ人の海外移住が禁止されます。これ以降に国境を越えた者は国籍を失い、その財産は国庫に入ることが定められました。ここにはポーランドなどの強制収容所へ送られたために、「国境を越えた」者も含まれています。強制収容所に送られたユダヤ人の家や土地は国が売却しますが、家具や生活用品は残されたままです。これらを処分する必要があります。こうした物品はユダヤ人が連行された数日後には、家の前で競売にかけられます。地方新聞などに競売が告知され、まさにスプーン一本にまで値がつけられ、時には残された食料まで売られることさえありました³。

競売に参加する人には、連行されたユダヤ人の具体的な最期は知りようがありません

2 Götz Aly, *Hitlers Volksstaat: Raub, Rassenkrieg und nationaler Sozialismus*, Frankfurt am Main: Fischer, 2006, S. 56.

3 参照、武井彩佳『ユダヤ人財産はだれのものか—ホロコーストからパレスチナ問題へ』白水社、2008年。

んが、東に移送された人がどうなるのかは、薄々知っています。殺される予定の人の残り香が消えないうちから、その残した物を購入するということには、誰もが何か落ち着かないものを感じます。戦時中ですから物資が欠乏しているのは事実ですが、当時の人はなぜ平気だったのでしょうか。

これは、長期にわたるプロパガンダの結果であったと思われます。ユダヤ人の害悪を説く言説が垂れ流されてきたため、その人種論が人々の間で内面化されていたのではないかと思います。このようにユダヤ人の排除が国民の「義務」であり「正義」とされる場合、ユダヤ人の財産の分配を受けることは国民の「権利」です。こうした「正義」や「権利」の感覚が、実際の動機の「卑しさ」を覆い隠していきます。自分が手にする物の出自は問わなくてよくなり、自身が受益者であるということも見えなくなります。ナチ体制に対する人々の同意が体制を存続させ、これが提供する利益が、また体制を急進化させていくわけです。ここにあるのは、まさに「同意による独裁」の姿です。

しかし実際には、利益の提供だけでは民族共同体は維持できないため、政権は飴と鞭を使います。鞭の部分は、国に逆らう者は厳罰に処すという脅しです。特に、国家反逆罪を犯したと見なされると極刑となり、子供でさえ死刑になります。ナチ時代の12年間で69人の少年少女が国家反逆罪で裁かれ、うち13人に死刑判決が出ています⁴。当時の処刑は、ギロチンが使われることもありましたが、本当の意味で極刑だったわけです。

刑法の基本的な考え方として、刑の重さは罪の重さに相応するというものがあります。では抵抗者は本当に死刑になるほどの大罪を働いたのでしょうか。実は、暗殺未遂など、武力による抵抗のケースはまれで、大半のケースが反ナチのビラを配る、「敗戦が近い」など仲間同士で話すといった程度のことでした。

抵抗運動としてのユダヤ人の救援

さて、抵抗の定義ですが、私たちはどのようなものを抵抗だと考えればよいのでしょうか。いろいろな抵抗の形があり、発覚すれば即処刑になるような組織的なものから、精神的なものまで、様々なレベルがありますが、一般的には、何かを「する」ことに

4 Wayne Geerling/Gary B. Magee/Robert Brooks, "Faces of Opposition: Juvenile Resistance, High Treason, and the People's Court in Nazi Germany," *The Journal of Interdisciplinary History*, vol. 44, No. 2, Autumn 2013, p. 211. 当時のドイツの法では、12歳から17歳までは「少年」、18歳から20歳までは「青年」、21歳以上の「成人」に分けられていた。

よって抵抗する場合と、むしろなにかを「しない」ことによる抵抗する場合の、二つに分けられます。

何かを「する」抵抗とは、例えばナチに反対するビラを配る、デモを行なう、クーデターを計画する、ユダヤ人を匿うなど、実際の行動を伴うもので、厳罰に処されます。対して何かを「しない」ことによる抵抗とは、例えば「ハイル・ヒトラー」という敬礼をせずに、「Gruß Gott」と挨拶する、ユダヤ人迫害から経済的利益を得る機会があっても利用しないなど、ナチ体制に参加しないことによって抵抗する場合です。消極的とはいえ、皆が同じことをしているときに自分だけしないのはかなり目立ちますから、実際には勇気があるものです。下の表はドイツ内での抵抗の例をその性格から分類したものです。

(表) 抵抗の形態

担い手	性格	実例	形態
軍部	愛国的 保守的 組織的	7月20日事件	暗殺計画 クーデター
ナチ 国防軍兵士	個人的 突発的 良心的	オスカー・シンドラ ヴィルム・ホーゼンフェルト アントーン・シュミット 脱走兵	ユダヤ人を保護 犯罪への負担の拒否
共産主義者 社会主義者 労働組合	政治的 積極的	赤いオーケストラ	ソ連への亡命、サボタージュ、 利敵行為、デモ、反対集会、 ビラ配り
キリスト教会 エホヴァの証人	宗教的 精神的	マルティン・ニーメラー ディートリヒ・ボンフェッ ファー	安楽死政策の批判 ユダヤ人キリスト教徒の援助 徴兵拒否
大学生	精神的 理想主義的	白バラ	抵抗の呼びかけ、ビラ配り
知識人 芸術家 作家	精神的	クライザウ・サークル トーマス・マン マレーネ・ディートリヒ	ヒトラー後のドイツを構想 亡命・海外での活動
若者グループ	自発的 非計画的	スウィングス モイテン エーデルヴァイス海賊団	集団行動、趣味の維持、 ヒトラーユーゲントとの抗争
一般市民 個人	個人的 良心的	ローゼン通りのデモ オットー・ヴァイト ゲオルク・エルザー	ユダヤ人（配偶者）の救援

さて、ホロコーストからユダヤ人を助けるという観点から、抵抗をみてみましょう。

まず簡単にナチ体制下のドイツのユダヤ人について説明すると、ヒトラー政権が成立した当時、国内には50万人くらいのユダヤ人が暮らしていました。30万人ほどは可能ならうちに国外に移住し、人口は減りますが、それでも1941年10月にユダヤ人の海外移住が禁止された時点でまだ17万人程は国内にとどまっていた。このあと、国内のユダヤ人は東に移送され、絶滅収容所などで殺されていくのですが、中には移送を逃れるために、地下に潜って生き残ろうとしたユダヤ人たちがいます。首都ベルリンで地下に潜ったユダヤ人は7千人ほどと言われています。

彼らは「地下生活者」とか「潜水艦(Uボート)」などと呼ばれたのですが、本来はいるはずのない人たちですから、存在自体が非合法ということになります。「存在自体が違法」とはどのような状態か想像するのは難しいですが、ある日を境にもはや存在しないはずの人間となることです。名もなく、住所もない、したがって身分証明書もない。身分を証明できなければ仕事に就けず、食料配給もなく、防空壕に入ることもできない。これは極めて過酷な生活であったので、ベルリンで地下に潜った7000人のうち、生きのびたのは1500人ほどにすぎませんでした。

こうした潜伏ユダヤ人を助けたのが、主にベルリンで活動した「赤いオーケストラ」のひとびとです。これはインテリや主婦や学生、共産主義者などがつながる緩いネットワークで、かならずしも思想的に一枚岩であったというわけではありませんが、ヒトラーへの反対という立場で結びつき、ユダヤ人を匿うことがありました。1943年6月19日、ベルリン大管区指導者ゲッベルズは、帝国の首都を「ユダヤ人不在(ユーデンライン)」と宣言しました。違法に国内にとどまる者に対し、食べ物や寝る場所を与えたりすることだけで大きな危険を伴います。長期間、同じ人物を匿うのは危険が多いため、数日単位でユダヤ人を家に泊めては、抵抗のネットワークでつながった人に後を託していきました。

つまり、ユダヤ人を助けるということが、一つの抵抗なのです。救援による抵抗は、暗殺計画のような組織的なものではなく、むしろ日常生活の延長にあります。研究によれば、ユダヤ人を助けるか助けないかは、多くの人のごく短時間で決断しており、よくよく考えた後に助ける決心をしたというケースはあまりなかったようです。したがって、それまでの個人としての生き方が、救済者になるか、迫害の傍観者になるかを分けたのだと思われまます。

このように個人としてユダヤ人を助けた人は、当然のことをしたまでと考えていますので、自分が救援に関わった事実を話すことはありません。ではなぜ私たちはこうしたドイツ人について知っているのかというと、助けられたユダヤ人が、自分の救済者の記憶を守るために語り続けてきたためです。救われた命が、救済者の記憶も、紡

いでいったわけです。

イスラエルにはヤド・ヴァシェムというホロコースト記念施設があります。ユダヤ人を助けた人々を「正義の人」、「義人」として顕彰しています。義人の認定の条件は厳しく、一度だけの援助ではなく、複数回にわたり援助していること、またそうした行為が具体的な危険を伴うものであったことが求められます。ドイツでは現在638人が義人として認定されています。ただ、これを多いと考えるのか少ないとするのかは意見が分かれ、国別で見ると一番多いのはポーランド人（7112人）で、次にオランダ（5851人）と続きます。オランダは小国ですので、ドイツの義人の数は規模の割には少ないと言えるかもしれませんが、ドイツが独裁下にあったという点は考慮する必要はあるでしょう。

アントーン・シュミット

ユダヤ人をホロコーストから救出することにより、ナチの絶滅政策に抵抗した人を1人紹介します。アントーン・シュミットという名前のカトリックのオーストリア人です。シュミットはまさにごく普通の、家庭のある中年の男性で、徴兵されて国防軍に入り、かつてはヴィルナと呼ばれていたリトアニアのヴィルニウスで、戦線からはぐれた兵士を集めて移送する任務についていました。シュミットについて、友人が後に回顧しています。

「彼は飾り気がなく、純真で、考えや話は単調、社交でも付き合い下手な人間だった。信心深くはなく、哲学的でもなく、新聞も読まなかった。ましてや本は全く読まなかった。決して知的な人間でもなかった。だが、彼の誰にも負けない個性は、人間性だった。」⁵

さて、ヴィルニウスは現在リトアニアの首都ですが、近郊にポナリという森があります。当時はここがユダヤ人の一大殺人工場になっていました。ポナリはもともと、燃料貯蔵のための大きな穴がいくつも掘られていた場所で、直径が30メートルくらいの大きさのものもありました。ナチの親衛隊と現地の協力者は、この穴の中でユダヤ人やポーランド人たちを大量に銃殺し、穴がいっぱいになると土で埋めることを繰り返していました。10万人ほどが殺害され、うち7万人ほどはヴィルニウスから連れてこられたユダヤ人でした。

5 ヴォルフラム・ヴェッテ『軍服を着た救済者たち—ドイツ国防軍とユダヤ人救出作戦』関口宏道訳、白水社、2014年、44頁。



ポナリの銃殺現場（2017年筆者撮影）

現在のポナリは、追悼施設になっています。銃殺が行なわれた穴は、形状から今でも分かりますが、埋められた遺体は、ドイツがソ連から撤退する際に、犯罪の証拠を隠すために掘り起こして燃やしているため、地下には灰が埋まっています。今でも小さな骨や遺品などが出てくるそうですが、ユダヤ教の掟では死者が眠る場所を掘ることは禁止されているため、発掘作業を行なうことはできません。このため、地中レーダーなど、掘らなくても良い非破壊的な手法で現在いろいろな調査が行なわれています。

ポナリでの虐殺に国防軍は直接には関わっていません。しかし、軍はユダヤ人を連行したり、作戦の行なわれる地域を封鎖したり、親衛隊の虐殺の後方支援をしており、ホロコーストの実行には国防軍の協力が不可欠であったわけです。

こうした状況で、ユダヤ人を救おうとしたのが、アントーン・シュミットでした。彼は最初はゲッターに食べ物を届けたり、ユダヤ人を匿ったりしていたのですが、ユダヤ人がポナリで殺されていることを知っていましたので、そのうちに自分でトラックを運転して、ユダヤ人をまだ比較的 안전한ソ連内部へ移送し始めます。軍用のトラックを使って、物資を運ぶふりをして人を運んだのです。それだけでなく、ユダヤ人の抵抗運動も援助するようにもなりました。

シュミットは、1942年1月に逮捕されます。彼の活動が明るみに出た理由は、ドイ

ツ軍の支配地域がツ連内部まで拡大し、シュミットがトラックで移送したユダヤ人たちも捕まってしまったためです。そこでヴィルニユスから逃げて来たユダヤ人が多数いることが判明し、移送網の存在が発覚したのです。シュミットは1942年4月13日に銃殺されます。銃殺前に家族への最後の手紙をカトリックの従軍司祭に託していますので、多少長いですが、引用します。

望んだことではなかったが、私は敗走兵集合所を引き受けねばならなかった。ここでは140人のユダヤ人が働いていた。彼らは私にここから連れて逃げて欲しいと要請した。そこで私は説得に負けた。実際、涙もろい私にとって、それがどのような意味を持つものであるかを君たちは知っているだろう。私は他のことは考えることができなかった。そして彼らを援助した。そのことが判決によって悪しきことと見なされたのだ。

愛するシュテフィとゲルダ、これはわれわれにとって過酷に過ぎる打撃である。しかしどうか、どうか私を許して欲しい。私は人間として行動したままで、実際に誰にも苦痛を与えたくはなかったのだ。

愛する君たちよ、君たちがこの書簡を手にしたときには、私はもはやこの地上にはいないであろう。君たちにもはや手紙を書くことができないとしても、われわれは間違いなくよりよい世界で、愛する神の許で再会できるであろう⁶。

ここには、職務で戦地に送られた軍人が、偶然にもユダヤ人と接触のある部署に配置されたことにより、ごく当たり前のこととしてユダヤ人の救済を選択してゆく、自らの良心で主体的に抵抗へと進んでいった人間の姿が浮かび上がります。しかし残された夫人と娘の戦後の生活は、かなり困難だったようです。裏切り者の家族ということで、窓ガラスが割られたりしたこともあったといいます。

戦後の評価

では、こうしたドイツ人による抵抗は、戦後どのように評価されてきたのでしょうか。端的には、連邦共和国（西ドイツ）では特定の抵抗運動が選択的に記憶されてきたと言えます。特にヒトラー暗殺未遂の7月20日事件と、白バラに関心が集まってきました。なぜでしょうか。

戦後、ドイツ人に対して、「集団の罪」ということが言われました。これは、ドイツ人全体が、ナチズムに責任があるという考えです。ドイツ人は民族全体が犯罪者で

6 ヴェツテ、61-62頁。

あることなどあり得ないと強く反発し、「集団の罪」の汚名をそそぐことが政治的な課題となりました。この際に、「集団の罪」を否定する根拠とされたのが、こうした抵抗運動の存在だったのです。西ドイツはナチに抵抗した「もう一つのドイツ」の遺産の上に、民主主義を再建しようとしたのです。その中で7月20日事件は、ドイツは軍部の中でさえも抵抗運動があったという意味で押し出されていきます。西ドイツは1955年に再軍備を行ないNATOに加盟しますから、もはやかつてのような軍事国家ではないという文脈で、この抵抗運動が位置づけられていきます。

対して白バラは、犠牲を顧みない純粋な若者の抵抗運動として、神格化されていきます。白バラの参加者は共産主義者のような強いイデオロギイ的背景がなかったため、感情移入しやすかったのでしょうか。1960年代後半に、ドイツは学生運動による政治文化の変革を経験しますが、学生運動は白バラによる権力への抵抗や理想主義などを自分たちの闘いと同一視し、一つのロールモデルとしていったと言えます。

では、アントーン・シュミットのような人はどう扱われたのでしょうか。その認知は比較的遅く、冷戦が終わった1990年代以降に様々な抵抗の形があったことが知られるようになりました。そもそも個人レベルでのユダヤ人の援助は史料が残らないため、当事者証言がなければ知られることもありません。1980年代後半によくこうした人々が「静かなる英雄 (Stille Helden)」であるという認識が生まれます。さらに冷戦の終結によって旧共産主義諸国の文書館が開放されたことにより新たな史料状況が生まれ、90年代に一般的に取り上げられるようになるのです。

ただし、抵抗の中でも最後まで認知されなかったのが、脱走兵です⁷。脱走兵は、ドイツの戦争が人種的な絶滅戦争であったことを思えば、犯罪への荷担の拒否は、抵抗の一つの形態であったと考えられます。現に前線の背後でホロコーストが展開したため、前線が下がれば、失われずにすんだ命もあったということになります。その意味では、脱走兵はさらなる虐殺を阻んだ可能性があると言うことができるのですが、脱走兵を裏切り者と見なす伝統は戦後も強く残りました。

これは、近代以降の国民国家が国防を担うことができる男性を国民として位置づけてきたことと関係があります。国を守ることができる者に市民としての資格を与えてきたため、この義務を放棄した者は、国の恩恵からも排除されることになると考えられてきました。このため彼らの名誉回復はナチ体制の犠牲者の中で最も後になり、彼らは戦後長期にわたり世間の目を避けて生きることを余儀なくされたと言えます。

7 参照、對馬達雄『ヒトラーの脱走兵—裏切りか抵抗か、ドイツ最後のタブー』中央公論新社、2020年。

ドイツには戦争に関する非常に多くのメモリアルがあり、特にベルリンのホロコースト記念碑が有名ですが、脱走兵に関しては、国家的な記念碑はありません。市民のイニシアチブでメモリアルを作ろうとしても、やはり戦没兵士の家族などからは反対が多く、公的なものを作ることはできなかったのです。

ユダヤ人の抵抗

では、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人の間では、どのような抵抗があったのでしょうか。ユダヤ人の側が抵抗の有無を問う理由は、やはりなぜ600万人もの人間が殺されたのかという問いに対して、自分たちで答えを見つける必要があったためです。

歴史家ラウル・ヒルバーグによると、ホロコーストのアクターには加害者、犠牲者、傍観者の三者が存在しています。傍観者には、直接的な加害に加わらない一般のドイツ市民や、ポーランドやウクライナなどドイツが占領した地域の現地住民が入ります。加害者と犠牲者の間に位置するこの無数の「傍観者」が、ホロコーストの展開を大きく左右し、彼らは時にはユダヤ人の救済者にもなり、同時にユダヤ人をナチに引き渡し、見返りを得る対独協力者にもなります。現在の歴史研究では、ホロコーストはヨーロッパ全体のプロジェクトであったと言われていています。つまり、ドイツ人だけが加害者だったのではなく、多くの協力者が各国にいたからこそ、600万人も殺害することができたと考えられています。

こうした研究の結果、ユダヤ人の抵抗の余地がどの程度可能であったか分かってきましたが、結論から言いますと、行動を起こす余地はあまりありませんでした。ホロコーストは独ソ戦の背後で相当なスピードで展開していきますので、当時のように情報の伝達に時間のかかる社会では、ドイツ軍が町に到着して初めて、ユダヤ人は自分たちに何が起こるのか分かるという状況でした。このため、ホロコーストに飲み込まれていった人々は、実際には何が起きているかよく分からないまま、殺害されていったと考えられます。そもそも、ある国家が、特定の集団を、最後のひとりまで抹殺しようと計画するなど、にわかに信じられることはありません。その点でユダヤ人の中にはまずナチの意図に対する誤認がありました。その上に地理的な要因や戦況、当時のユダヤ人コミュニティの分裂や、武力を行使する伝統の欠如など歴史的な要因が加わり、一般的に抵抗運動が組織されにくい状況にあったと言えます。

したがって、ユダヤ人の抵抗が始まるのは、基本的には死を直前にした段階でした。ゲットーなどに入れられて、虐殺の情報が漏れ出るようになり、今抵抗しなければあ

とがないという状況になって、行動に移すことが多かったと言えます。子供だけ海外に送り出したり、ユダヤ人ではないふりをして「アーリア人」の社会に紛れ込んだり、ナチと取引することで延命を図ったり、取り得る選択肢の中から選択を繰り返しました。生き延びること自体が抵抗であったと言えます。武力抵抗という点では、森に潜伏してパルチザン活動を行なう者もいれば、ワルシャワ・ゲットーや絶滅収容所などでの武装蜂起もありました。

ドイツ人とユダヤ人の抵抗を比較すると、ドイツ人の場合は政治的な信念や宗教的な信仰心が基礎となっていることが多く、抵抗するかしないかはその人の選択の問題と言えます。また抵抗から離脱することもできました。しかしユダヤ人の場合は、ほとんど選択肢のない選択であったと言えます。抵抗の目的は生き延びること以外になく、生か死かの境界で決断していたのです。

ホロコーストの後、ユダヤ人による抵抗にも、同じように政治的な意味が与えられてきました。それはイスラエルという国が自分たちは「闘うユダヤ人」の流れを汲むと宣言してきたからです。

シオニズムは、世界は本質的に反ユダヤ主義的であるゆえ、ユダヤ人には自分たちの民族国家が必要であり、武力で自分たちの身を守るという思想に立っています。ヒトラーが登場したとき、シオニストはヨーロッパのユダヤ人にパレスチナ移住を呼びかけましたが、聞き入れられませんでした。このため、武器を手に立ち上った者たちはユダヤ人の名誉を守った英雄だが、殺されただけの人は唾棄すべきディアスポラのユダヤ人であるという位置づけとなります。

このため、イスラエルではホロコーストにおいてまず何を記憶するのかという点が議論されます。1951年に「ヨム・ハ・シヨアー」と呼ばれるホロコースト記念日が制定されますが、これは正式名称は「ホロコーストと英雄的行為の記念日」といい、ワルシャワ・ゲットー蜂起の開始と関連づけられた記念日となっています⁸。実際には、武装抵抗をしたユダヤ人の数は圧倒的に少なく、大半は抵抗する余地もなく殺されたという事実があるにもかかわらず、抵抗の事実ばかりが選り出されて記憶されていくわけです。これに対し、国連がホロコースト記念日としているのが、アウシュヴィッツ解放の1月27日ですから、こちらは犠牲の記憶と言えます。

ただし、ドイツで抵抗に対する概念が変化したように、イスラエルでも様々な抵抗の形態が認知されるようになって現在に至っています。1960年代には、抵抗はまさ

8 イスラエルにおけるホロコースト記念については、参照、武井彩佳『〈和解〉のリアルポリティクス—ドイツ人とユダヤ人』みすず書房、2017年、第5章。

に武力での「レジスタンス」を意味するヘブライ語が使われていましたが、これが一般的に「立つこと」を意味する言葉に代わったのは、こうした変化を反映していると言えます。その中で、精神的な抵抗も抵抗のカテゴリーに入れられるようになりました。

この文脈で最後にご紹介するのは、精神的な抵抗の究極的な形態とも言えるものです。「記録を残す」という行為です。

ホロコーストではユダヤ人虐殺の記録を残す人間も、殺されていきました。ユダヤ人が本当に全て殺されてしまったら、ホロコーストという事実について語る人間もいなくなってしまうという危機感から、後の世代のために記録を残そうとした人たちがいたのです。実際にナチは、自分たちの犯罪を念を入れて隠蔽してきました。まずもって、ヒトラーがホロコーストを命令した文書は存在しません。通常、殺人の証拠は死体の存在に他ならないのですが、それも燃やしてしまいました。また、ナチは人間の想像を超える犯罪を、人は信じないだろうと考えていました。ある親衛隊は、こう言っています。

「(ユダヤ人の殺害について) おそらく疑惑が残り、論争が巻き起こり、歴史家の調査もなされるだろうが、証拠はないだろう。なぜならわれわれはお前たちとともに、証拠も抹消するからだ。そして何らかの証拠が残り、誰かが生き延びたとしても、お前たちの言うことはあまりにも非道で信じられない、と人々は言うだろう。」⁹

アーレントも言っていますが、われわれは想像を絶するものは信じることができません。この点をナチはよく分かっており、そこにユダヤ人の抹殺という事業の成功の鍵を見ていたと指摘しています。

歴史の事実からも抹消される状況に抵抗したのが、アウシュヴィッツのゾンダーコマンドです。ゾンダーコマンドとは、絶滅収容所でユダヤ人の殺害を手伝わされたユダヤ人の労働班のことで、移送されてきたユダヤ人のガス室への誘導や死体の焼却など、もっとも凄惨な作業をさせられた人々です。ゾンダーコマンドの人間は、究極の犯罪の目撃者ですので、口封じのために大抵数ヶ月のサイクルで殺害されます。

アウシュヴィッツのゾンダーコマンドの数人が、殺害の記録——移送されてきたユダヤ人の数、殺害の手順、殺された人の名前など——を紙切れの裏などに記し、瓶や箱に入れて、ガス室の周辺にいくつも埋めたのです。ゾンダーコマンドの人間はほぼ確実に殺害されますので、自分の死を受け入れた上で、後世に犯罪を告発しようとしたのです。こうした文書はガス室の周辺から戦後断続的に発見され、最近これまで判

9 ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお』橋本一径訳、みすず書房、2006年、30頁。

読できなかった文書が最新のデジタル技術で判読できるようになったことがニュースとなっています。

アウシュヴィッツでは、ゾンダーコマンドの隊員が殺害の証拠となる4枚の写真も残しています。そのうちの2枚は、ガス室の施設と思われる建物の内側から、屋外で死体が焼却される様子を撮ったものです。作業を行なうゾンダーコマンドの隊員が数人映っており、地面には死体、さらにのぼっている煙を見ることができます。もう1枚は裸で殺害へと追いやられる女性たちが小さく映り込んだ写真、そして最後の1枚は、木々の一部のみが写った写真です。これは焦点もあっておらず、隠し撮りであったことが明らかで、どのような瞬間にシャッターが切られたのかうかがわせるものとなっています。絶滅収容所にカメラを持ち込むこと自体が死を意味しますが、これらはまさに「地獄を切り取ったフィルム」と言えるものです。ネガは歯磨きチューブに入れられて、アウシュヴィッツの外に持ち出され、ポーランドの地下抵抗運動に渡され、現在の私たちが地獄の断片を知るに至るわけです。この4枚の写真は、ウィキペディアでパブリックドメインとなっていますので、「アウシュヴィッツのゾンダーコマンドの写真」と検索すればすぐに見つけることができます。

この4枚の写真をもとに、ゲルハルト・リヒターという、ドイツ最高峰の現代画家が、「ビルケナウ」というタイトルの連作を発表しています。4枚の写真をトレースして、その上にペイントを重ねてゆく、リヒター特有の手法で描かれています。この4枚の連作のコピーが、現在ドイツの連邦議会のエントランスの壁面に飾られています。興味深いのは、その対面の壁に、同じリヒターが描いた、ドイツ国旗をイメージした赤・黒・金の作品が掛かっていることです。これは極めて象徴的なことと言えるでしょう。つまり、現在のドイツという国は、ホロコーストの記憶も、自分たちのアイデンティティの中に取り込んだ国家となっているということです。ここには、今日お話ししてきた、ドイツ人の抵抗と、ユダヤ人の抵抗が、出会い、混じり合い、同時に加害の歴史も国の遺産として継承する、ドイツの姿があるかと思います。